

仰付置けるが、利常卿御急變の飛脚江戸へ參着するといなや、今枝民部に我等は參ると申捨て、晝夜の堺もなく馳歸り、十一月廿二日小松へ參着す。市三郎の妻女は淺井大助の娘にて、幼少の時父母におくれ、於御城成長し、市三郎に嫁娶有りしが、女中には稀なる心さまにて、物毎利發に有りけるゆゑ、頓て飛脚を云付け、市三郎殿に逢ひ次第、此の文を捧げよとて遣しける其の文に、

わざと飛脚參らせ候。殿様御かくれ被遊事、申つくしがたく、御心の内おしはかり、同じおもひにて御座候。不_レ及申候へども、日頃御心懸の事、おろかにはおはしますまじけれど、必々やどへ御越候事、御ゑんりよなさるべく候。五郎ざゑもんは御目にかゝらんとて、出迎に參候。我身は去年の御いとま乞より、別れと思ひきはめ候へば、今更御めにかゝりたくも御さなく候。とかく生死は世の中の掟、其ため一筆申_レ候し。

と書きて、文箱に入れやりけると也。市三郎半途にて、此の文を見て大きに笑ひ、硯取よせ、みづから返事を書きにけり。

殿様の事其方思ひの通り、扱又覺悟の事おろか成事にて候。委細は五郎ざゑもん申べし。

とさら／＼と書留め、飛脚に渡し、追付市三郎・左近兩人同道し、御城へ上りけり。則ち御次にて人々に對面して泪をながし、河合傳次を招き、一期の納めに御上下を拜領せんとて、御召下し二具取出させ、謹んで頂戴し、聲を揚げて落涙あり。扱其の後御靈前に參りて、拜禮焼香して御次の間へ退出あり。頓て御勝手より湯漬拵へ居ければ、是以て御威光有難しとて、三度戴き飲食し、夫より市三郎は立出で、乗物に乗り、直に日蓮宗三光寺へ急ぎ、御供の思ひ立委く語り、頓て敷皮の上に居直り、我が主君の同宗に成り、黄泉旅行の供致すなれば、以來禪宗たるべし。存生の内は代々の宗門なれば、是にて露命をおとす也とて、懷中より辭世とおぼしくて取出し、三方の上に指置き、同座の衆へ一禮有りて、脇差を押戴き、腹十文字に切る處を、和田十郎右衛門刀を振あげ、三千世界を一刀の上に滅却して、千萬の妄想を一刹那に脱して、大安樂の身となれり。竹田が志の程、實も利常卿常々被仰けるは、市三郎は生れ付たる

利發者、聊も表裏なしとて、何にても御隱密の大事の御談合、此の人の外なかりしが、御目がね之程はづれずとて、猶々利常卿を他の國にても感じ奉りけるとなり。市三郎の辭世詩歌。

君恩難謝斷_レ生命。鮮血淋漓瀆梵天。四十三年閻浮夢。無明醒盡一時圓。
君がいにしでの山路の道芝も

おもひきるにはさはらざりけり

按ずるに、右三壺記に載せたる月日等過聞なりけん。朱書に、今年江戸天守臺御普請に取懸りたり。面々十月九日に丁場を引渡し、翌十日人持及び與頭以下普請奉行等一統拜領物被仰付、罷歸休息可仕旨被仰付、何れも十月十一日に江戸發足。竹田市三郎は十月十九日に小松到着、其日殉死也。于時四十三歳。子息五郎左衛門忠張十六歳、小松懸橋まで迎に出る。市三郎妻女は法舂して長福院と號す。とあり。拾纂名言記にも、竹田市三郎・古市左近、天守臺の跡仕舞仕り、江戸より罷歸申すとて、八代と田中との途中にて御逝去の飛脚に逢ふ。依之夜を日につぎて來るとて、十月

十九日の四つに小松へ着、直に御棺の前に伺公仕り、落涙して奉拜、御臺所へ出で御食被下、兩人共に退出仕り、二丸の筋違橋にて、市三郎は直に寺へ赴き、左近は母に逢はんとて宿所へ赴く。市三郎は越中魚津より宿所へ使者を遣し、常々申通御供仕也。せがれ五郎左衛門にも逢ふに不及儀なれども、親子の名残なる間、梯まで罷出で可_レ遂對面。又介錯の事は我等寄子にて別懸なれば、和田十郎右衛門へ可_レ頼。寺は國聖寺にて切腹可_レ致なれども、我等親常々申含事あれば、草の陰にても無_レ心元可_レ存の間、自分の寺にて可_レ仕とて、自分寺に極る。依之自分寺へ參りけり。老中并淡州公より神戸藏人を指留に被遣といへども、承引致さず、十九日の午刻御供す。とあり。三州志續藝餘考に、市三郎忠種は小松日蓮宗本成寺にて自刃す。世本國松寺にて自刃とあるは誤り、三壺記に三光寺に作るも亦誤りなり。今掃部家に就いて、之を正すと註記す。

○稻垣意閑邸跡

竹田氏邸跡の向角也。元祿六年の士帳に、稻垣三郎兵衛居宅、村井出雲近所川上。とありて、邸地の横を倉月用水流